

## 子どもらと一緒に

# 自然をとりもどすことの意味を考えよう

『慶十公園林』と『木を植えた男』にふれて

安部 富士男

「おい、こっちだよ」晴れ渡った冬空の奥から聞きなれた年長児の声がこだましてきました。はっと、見上げると、今日も、けやきの梢に高々と登って、年長組の剛が「園長先生、富士山が見えるよ」と呼びかけてきました。崇人や美幸が、一本一本の枝の強さを確かめながら後に続いています。剛が「その枝、枯れてるぞ」と声をかけてきました。次々に、高さに挑む子どもたちを見上げていると「ドングリ、力もちだよ。来てごらん」年中組の大地が駆け寄ってきました。手を引かれて子どもの森

に入ると既に数人の子が寝転んで何やら見つめています。「園長先生、ドングリが三人で落葉を持ち上げているよ。一人は片足で立っている。見てごらん」と言うので、私も寝転んで子どもたちの指さす方を見ると、根を張ったドングリがすくっと立って落葉を支えています。一つは根が土から出ているドングリ本体を持ち上げています。一本足で立っているように見えます。顔に黒々と土をつけた孝が「五人だよ。片足も入れると六人だ」と目を輝かせています。

年少組の子どもたちが、霜柱を棒で叩いて「雪になっちゃった」と声を揃えています。

山羊係は、パンダ（山羊の名前）を散歩に連れだしたり、キャベツの間に落葉を挟んでサンドウィッチをつくり朝御飯をあげたりしています。

森の中で、子どもたちは、さまざまな冒険に挑み、発見の喜びを伝え合い、考え合い、共感し合い、仕事を楽しみ、工夫し合い、支え合いながら、遊び、仕事の世界を広げています。

日曜日など、幼稚園の森は、三々五々と遊びに来る子どもたちを四季折々の美しさで迎えてくれます。お年寄りが孫と遊びに来たり、乳飲み子をだいた母親が散策を楽しんでいます。

森のなかで遊び・仕事を楽しむ子どもたち、稚児と森を散策する大人たちを見つめながら、森との交わりを生活に取り戻すことが、人間の幸福を築く基本的条件の一つであると実感します。

私の好きな本に宮沢賢治の『虔十公園林』があり

ます。「いつも縄の帯をしめてわらって杜の中や畑の間をゆっくり歩いているのでした。雨の中の青い藪を見てはよるこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹を見付けてははねあがって手をたたいてみんなに知らせました。けれどもあんまり子供らがばかにして笑うものですからだんだん笑わないふりをするようになりました。風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどはもううれしくてうれしくてひとりで笑えて仕方ないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついでごまかしながらそのぶなの木を見上げて立っている」虔十が、ふとしたことから杉苗を植え、それから死ぬまで杉林を大切に育て続けました。彼が育てた杉林は、子どもたちの格好の遊び場、大人たちの憩いの場となり、心の故郷になっていきます。

賢治が岩手に生まれたその前の年、フランス南部プロヴァンスにジオノが生まれています。ジオノの代表作の一つに『木を植えた男』という短編があります。

ジオノが、井戸も涸れ人の気配もない朽ち果てた山村を一人旅して、咽喉がかわき水を探している時、年老いた羊飼いに会い、水を分けてもらい小屋に案内されます。粗末な食事の後、老人は、黙って樫の実を丁寧に選別してから眠りにつきます。翌朝、老人はジオノを山に誘い、杖で穴をあけ、実を入れ土をかぶせていきます。樫を植えていたのです。貧しい生活の中で、老人は、荒地が豊かな大地に蘇生していく中で草木も動物も人間も命輝く日々を過ごすことができることを信じて、見渡す限り荒れ果ててしまった大地に、数十年に渡って、毎年、その土地の条件に合わせて、樫などの種を蒔き続けていたのです。『木を植えた男』はこの老人の物語です。

老人は、挫折に屈せず、何の報酬も期待せず、芽を育み、若木を育て、木々の手入れを工夫し、緑なす豊かな自然を蘇らせる努力を続け、大地がゆっくり少しずつ緑に覆われていくのを見つめることだけで満足し、敬虔な祈りの日々を送っていました。そ

こに人々が定住し労働に勤しみ、幸せな生活を過ごすのを見守りながら、最期は養老院で安らかに約九〇年の生涯を閉じています。荒地を幸いの地としてよみがえらせた老人に、人間のすばらしさを実感します。「魂の偉大さのかけにひそむ不屈の精神。心の寛大さのかけにひそむ、たゆまない情熱。それらがあつて、はじめて、すばらしい結果がもたらされる」というジオノの言葉に深い感銘をうけました。私たちはこの老人の生き方に触れて、人間性に裏打ちされた「やさしさ」とは何かを考え合う手がかりを発見します。

私は、卒園児たちと一緒に、これらの作品を読み、自然や人間とは何かを考え合いたいと念じています。

冒頭に紹介したような幼児体験を基礎に、人間らしく生きるということは、自然の恵みに感謝しながら豊かな遊び・仕事のある生活を築くことであり、自然を守るために、静かに身をはって戦う知恵と力

を身につけ合っていくことであることを、愛することの意味の深いところにつなげて理解し合いたいと

願っています。

(安部幼稚園園長・日本体育大学女子短期大学)

# 『病院で死ぬということ』

山崎章郎 (主婦の友社)

中村 弓子



今年三月中旬に、日本医師会の生命倫理懇談会が末期のがん患者などに対する末期医療のあり方について「患者の尊厳死の意志を尊重して、患者が望む場合は積極的な延命処置を停止してもよい」として、尊厳死を求める患者のための「自然死法」制定を打ち出す報告書をまとめて発表したことは新聞紙上などで大きく取り上げられたので記憶していらっしやる方も多いのではないだろうか。(なお、苦痛

を訴える患者に対して注射をうつなどして死なせる「安楽死」と「尊厳死」が画然と区別されなければならぬことは、この時の報道でも指摘されていた通りである。)

今の日本の精神風土のなかでは、この「尊厳死」そのものがまた単に「延命処置の停止」という「死に方」の一つのマニユアル化する危険性も孕んでいるが、しかし本来「尊厳死」とは、まさに、医療と